幻想世界クナウザス基礎事項注釈

（新暦以降・タラム梵子科学研究機関による統一見解より）

※本編は８Ｐより始まります

1、新暦までの歴史簡易年表

紀元前150億年　地球の下位次元宇宙とは捩れの位置に、高次元宇宙開闢・唯一惑星誕生、半球惑星に

紀元前45億年　クナウザス世界の区域限定・混沌の渦形成、

混沌期～紀元前二十億年　渦の内部で大多数の生物門出現、熾烈な生存競争

神話期～紀元前十億年　（ここまでを創生紀と称す）四大虚神に闇の虚神が虚報を流し、大戦争勃発

古生代～紀元前数億年　（至低紀などを含む）神話戦争停滞、代理戦争的な人種・民族同士の闘争

中世代～紀元前数百万年（浮島空紀などを含む）平均化進化、共存知的生物種の台頭

近代～新暦元年以降　低次元宇宙より入植軍来襲・クナウザスという世界名が初めて使われる

現代～新暦六百年以降　大陸間大戦後・踏破家集団の活躍・国際交易の活発化

2、梵子という概念について

量子、霊子、といった高度な概念・素子をすら凌駕する究極の絶対完全統一理論を構築する素子が梵子である。これは、物質や情報だけでなく、行為、意義、結果、因果、あらゆるものの『中庸』状態にある素子として認識される。次元レベルが低いほど梵子は『素化』という現象を起こして互いに偏重しながら収束してしまう（ゆえん低次元宇宙の地球上では蓋然であるが、それゆえ、非効率な努力の無理強いが制作用の強い現代科学なる虫禍を生んだ）が、クナウザスにおいては、高次的因果律の下、梵子がそのままで空気のようにふんだんに存在するため、これを利用すれば原理的には『指先一つでどんな願いでも叶えられる』はずである。これは、いわゆる『念』をデバイスとした『梵子術』や『梵子科学』などの要素として扱われている。なお、素梵子は『固化』する前の半熟状態なら別の利用価値があり、これをもっ

て独自の召還術を行使することを『素梵子他象』と呼ぶ。

3、アナケー発祥説について

本稿などでも紹介される歴史観が確固として存在するにもかかわらず、やはり絶対的根拠のある科学的事実として、後世の多少なりとも学のあるクナウザス人は同時並列的に以下のような事実を受け入れねばならない。『クナウザスは、不測の事態によって自壊してしまった、別のより有意義な世界の後釜として、そのブラックホール的な影響に引きずられ、ほんのちょっと前（新暦612年・学説発見時）に、この上位世界の上に捏造された世界である』。上位世界については、エルピースという唯一究極の知的生命体が生活していたということしかわかっていないが、それに由来する出土品（『無窮印』と呼ばれる）は少なくなく、特に学説の根拠が見つかったアナケー地方で多く産出される。

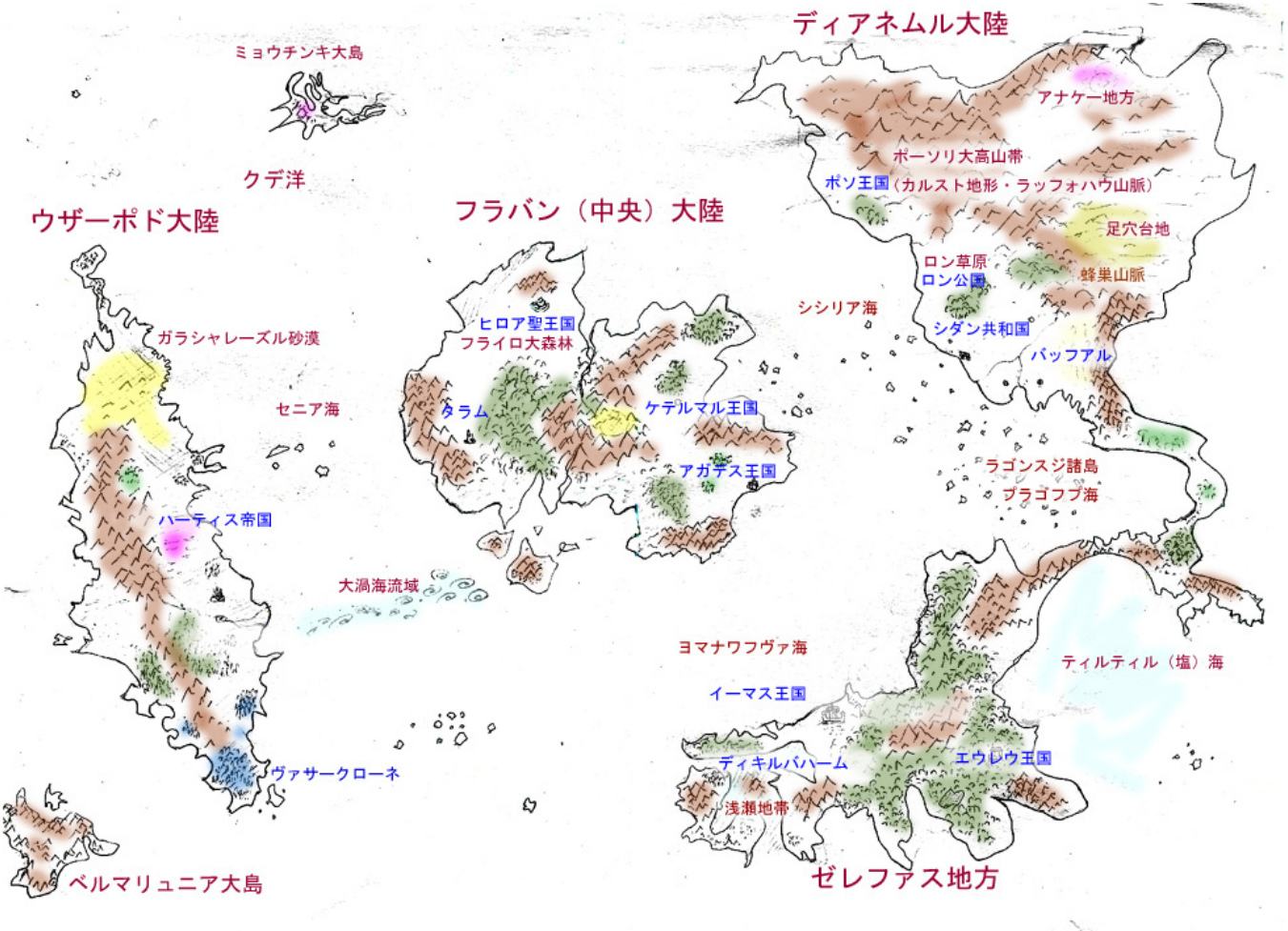
4、虚神と信仰について

終結へと向かっていた混沌の時代に事実上の引導を渡したのが『四大虚神』の誕生である。これは素梵子化した自然概念の基礎たる『地水風化』の各々のエナギーが独自の渦を形成し、さらに同系統の力を呼び集めて生み出された、一種一固体の、無限の生命力を持った超生命体である。神のごとき力と世界に対する影響力を持ちながら、目に見えて現存する生物的存在でもあるために彼らは『虚神』と呼ばれ、生物とも神ともつかない曖昧な位置づけに属しているのである。彼らの他にも5体の虚神が発生した。虚神の影響でクナウザスは新たなる機微を内在する世界へと急激に変貌を遂げていく。それに合わせ、兄弟的位置づけにある地球のような昼夜の区別や時間概念、天空を彩る星々が欲しくなった地の神を除く三神は、後付的ではあるが、これらを創世の仕上げとして付け足すべく、各々同時期に『天の虚神』を『空想』した（その実在は不明とされるが、神の（強い空想は現実に勝る意義を持つ）。地の神は独自に別種の子を宿し、大地を刷新する偉大な仕事を成し遂げた植物界の王

を『樹（草木）の虚神』に引き上げる。また、四散した混沌の渦の残り香が中央大陸に集結、四大虚神を始め、混沌期以降の世界を憎む『闇の虚神』となり、その反動現象として『光の虚神』も出現した。近代末期、この両神が対消滅したため、『無の虚神（最終神）』が現れる。他にもあらゆる神を区別なく一個のものとして考える『総体（相対）神』という考え方もあり、クナウザス由来でない人種の『人者種』が興した『創世主教』『命題教』『魔導王教』『努力神教』などの新興宗教に連なる。現代では、世界の四大を実虚神、それ以外を非実虚神と定義しているが、各宗派はそれぞれに独自の神学を持っており、あまり学術的客観分類を気にしていないことが多い。それ以外の土着的な信仰は『河童神』などと総称される。こういった虚神の存在と梵子や素梵子の流動経路、近年の別次元への扉は密接に絡み合い、術法や信仰とも深い因果関係にある。だが、あくまでも信仰は内的な宇宙に浸透することで外的な宇宙の理に触れることであり、信じる精神の素養や状況に左右されるものであるから、教義と神々の意識や意義が必ずしも合致せず、それどころか全く無関係なことすらある。

5、共存知的生物種（共知）

クナウザスでは生物の進化が早すぎるほど早く、後期になるほど退化的進化が進む（それにともない、世界様相は大雑把な変動の断続から機微の継続的波形に喩えられるようになる）。梵子を術によって利用する人類の中で、数種類が支配ではなく世界人類共存の概念とその手法を永きに渡る闘争の中からついに獲得した。これをもって現代の区切りともいわれる。『平均化進化』はその功罪的現象であるし、遺伝的に異なる種族同士が子を得られる『授子の儀』の確立こそはその主柱である。このような高次元的世界の『日常』を覗くことは、それ以外の世界に住む者にもある程度の有意義な見聞とはならぬまでも、慰みくらいにはなることであろう。



※クナウザス世界地図（現代）

※共存知的生物種（現代）

種族名称		5段階評価											
		腕力	物理防御	対梵防御	梵子力	知能	念力	生命力	敏捷性	器用度	術技容量	耐久値	合計
特徴・能力							容姿・性質						
種の保存・発生起源													
指者	ヌンマラー	3	2	2	3	4	3	3	3	5	3	3	**34**
指が多くあり、非常に器用。脚が腰の真ん中に一本だけ。足底は無機質的で、滑るように移動するため、地形効果を受けにくい。耳が無いが、体全体で聴ける。寿命は人者（後述）と同じだが、病気には強いし老いにくい。万能で生殖能力もバランスが良い。角のような構造で梵子力を探知できる。							体毛が全くない。体色は様々（先祖の魔族による）。超優秀なカツラが服と同列に扱われる（クナウザスに禿の恥は無い）。個体差が激しい。人口第一位の知的生物。						
温沌期の魔族を祖先とし、世界中で様々な人種に進化したが、12本指の種族が優勢となり、最近ではほとんど同一系統である。													
稼動気	ワンクフルター	2	4	2	2	3	3	4	2	3	3	3	**31**
変形能力（極端なものは不可）。ゆえに防御力が高い。応急的に代替細胞手当てができるので、生命力が高い。寿命は人者と同じ。訓練しないと変形能力が著しく低下するため、一般民衆はあまり他種族と変わらない。							人のような平均容姿から他種族のような姿をランダムで取らされるが、不定形にこだわることもできる。高齢になっても比較的老いを隠せる。男女別は見かけと性質だけ。						
単細胞生物の特質、気体生物などの無形性などが概念として引き継がれている種族。温沌時代の凶悪なウィルスなどから発生した『悪寒気』族の奇形として生まれ、狡猾さと変身能力が弱く、虐げられていた。だが、社会的種族の台頭で立場が逆転していった。【特殊生殖】性別が基本容姿や性質（これは男女の別）以外に4つあり、それぞれがある時期に一定範囲に偶然でも集まると、勝手に分裂が始まる。儀式を行わなくても、これは確実に両親の性質を受け継ぐ稼動気になる。姿は相手側に近い。分裂後しばらくは魂が形成されないため、破棄してもかまわない。													
砂魚者	サンドシュビマー	4	4	2	2	3	3	3	3	3	2	4	**33**
砂や泥に潜れるが水泳は普通。戦士としての能力が高い。好奇心が強く、努力家が多い。食あたりに強いので食事に困らない。病気に強い（ガン以外）。再生能力有。寿命は70歳くらい。老いても能力値が下がりにくい。							少し背が低いが、がっしりした体格。平均化進化の影響を強く受けている種の一つで、最近では個体差が激しく、人そっくりのものも。鯵や皮質は鱗のような感じ。						
初の脊椎動物として魚類が海から陸へ上がった功績が、クナウザスで人種として結実したもの。神話期の海洋で生まれ、能力の低い魚だったが全く不得意な砂漠へと機性を払いながらも進出し、進化を勝ち得た。その後風神の従者として暮らしており、数はそんなに多くないが、近年では各地に進出している。													
虫者	インゼクター	3	3	2	3	3	2	3	3	2	3	3	**30**
額の3つ目に透視能力有。腕が一対多く、装備が多くできる。雄は雌に縦諧羽があって歌に術力を込められる。雌はバッタのような細い足でジャンプできる。また、乳房が3つある。寿命が長くても15年ほど（大人として覚醒してから）だが転生が容易。							特殊能力分以外は人とほぼ変わらない。特別美麗なものは少ないが、皆それなりの個性を持って相手を惹く（種の保存のため）。成体のみで、老年や幼少期（虫）はない						
質より量的な、無脊椎動物の花形である昆虫類の概念を引き継いだ種族。【特殊生殖】恋愛などをした際（片思いでもよい）に、稀に、その二人の性質を受け継ぐ魂が虫の卵に宿ることがある。これを古い虫の一族が回収して育てると虫者になる。転生はこのシステムを利用する。しかし、こういった『純粋』の虫者は古い一族の過疎化とともに近年激減している。儀式で生むと、虫が出てくるので最初は驚くかもしれない（しかも凶暴な場合もある）が、段々知性もつきはじめ、数年で『脱皮』し、成人した人型になる。													
樹曼	パオマー	2	3	3	3	4	3	3	2	2	4	4	**33**
植物系専用術法を多数習得可能。対植物攻撃に弱い。光合成や土からの摂取で生き延びられる。寿命は100歳くらいだが、数千年など、老いようもさらなる長寿もありえる。老いるほど植物部位の割合が多くなる。老いを嫌がって自ら土に還る儀式を行う者も多い。独特の哲学を持つが、ほとんどが穏やかで知性は高い。							性別がないので中性的なもの（オカマではなくて、中性）も多い。かつては樹木に近い姿をしていたが、近年では平均化進化の影響で外見上は人者と区別がつかない（しかし皮膚の中は植物っぽい）者が多く、別種として分類する人類学者もある。その場合でも、植物的な部位が体のどこかにくっついている（個体による）。						
世界自然環境を支える生産者としての功績がクナウザスにおいて結実した種族。樹神には彼らの僧正中で最も優秀な者が（神が転生したとして）選ばれる。【特殊生殖】自分を死んだ後に埋めたところから生えた植物（瑞株）が稀に樹曼になることがある。ただし、その性質や能力、記憶は全く親と連結しないオリジナルである。（付近の土壌や虫の媒介も関係するらしい。これは故人には哀しいかもしれないが、種としては遺伝的刷新ができて良いことかもしれない）いずれにせよ、そこから生えた植物に成ること、それだけでなく土に還るということが彼らにとって転生以上の極楽浄土である。													
猫者	カッツァー	2	2	2	3	3	2	3	5	2	3	3	**30**
ひたすらに素早い。しかしその他能力値に秀でるところはない。爪や牙も武器として弱される。人口は多くない。ごく稀に遺伝的に突出した固体が生まれることがある。寿命は人と同じくらいだが病気に弱い。早く成人する。古い名残として雌の幼体には7対の乳房があるが、これだけは平均化進化のため、成体になるに従って一対に減る。							成体になってもほとんど猫そのものの姿。幼少期は猫であり、人語を解さず、猫同士でしか喋れない（個体差があり、優秀なものは可能な場合も）。性格は独特だがあらゆる種族に受けが良い。ムードメーカーとして、なんとなく仲間に溶け込んでいることも少なくない。						
平均化進化現象も何のその、元来の祖先の姿をほとんどそのまま人類種として引き継いでしまっている唯一の種族としては興味深い。この特別扱いは能力云々よりも何か別の趣向？が働いている可能性も否定できない。5億年前ほどに犬者の祖先などから派生したらしいが、定かではない。													

種族名称		5段階評価 腕力	物理防御	対梵防御	梵子力	知能	生命力	敏捷性	器用度	術技容量	耐久値	合計
特徴・能力							容姿・性質					
種の保存・発生起源												
飛竜者	ドラッヒャー	2	2	2	3	3	2	3	4	2	3	3	**29**
羽の先に手がついているだけなので武器装備は弱いが、尾や脚は強い。訓練次第で飛行能力が身につく(鳥のようにはいかない)。毒の実に耐性があり、唾に混ぜて吐く攻撃も可能。寿命は60歳くらい。幼少期が死にやすい							始祖鳥のような姿だが、翼があり、男らしく誠実な人格が多いため、他種族の女性に人気が高い。9割男で、女性は女王や巫女として担がれる。					
神秘的な存在である恐竜より進化したとされ、翼持つ美しい種であり、次代の地球人類種候補であろう？と思われる鳥類に敬意を表し、クナウザスに顕現した種族。【特殊生殖】雌は儀式(古い集落にのみ残る)によって卵を大量に生み出し、たくさんの子を残せる。ただし、生まれるもののほとんどは鳥や翼竜であり、ペットや家畜としての価値しかない。このような女性は大変だが、村では全力で生涯大事にされた上に死後も神としてあがめられる												
瘤取者	ウェルストネマー	5	3	3	4	3	2	3	2	2	3	5	**35**
体がごつごつしていて筋肉質、大柄な上に瘤には梵子力を膿のように吐き出す汗腺があり、基礎能力値が高い。元巨人族。寿命は40くらいだが、いつまでもゆっくり成長を続ける(後期は老いと成長が同時進行する)。							多少魔物の風合いが強いが、それを格好良いと思えるなら魅力は高い。とにかく強いのでゲーム的？には一人は欲しい。					
人をモデルにしながら普通の人に非ずという巨人族の特殊性から端を発した種族。その派生は諸説あるが、共知人種の中では一番古い血統ではないかと思われる。												
雪聖	シュネーハイル	2	2	3	4	4	4	3	3	3	3	2	**33**
目が中央に一つしかなく、読心術ができる。また、そちらの耳が両方とも長く、訓練次第ではかなり遠方の音を聞きつけられる。雪に埋もれても生きられる反面、暑さに弱い。接触や息で物を冷やせる。寿命は150歳、100歳以降で老いが始まる。成体になるまで時間がかかる。							小柄な人、といったところ。ちょっと不気味な感じもするが、美形が多いので悪しからず。7割は女性で、海を渡った火神に使えるカザリフビー族は飛竜者に人気があったようだ。					
幻想世界には欠かせないいわゆる妖精といった概念を引き継いでいるが、クナウザスでは素梵子儀式より創られた人種として異彩を放つ。この発生起源のために生み出した水女神の力に偏っているが、知性が高いので術法や学術なら難なくこなす。												
人者	メナー	3	2	2	2	4	4	3	3	3	3	3	**32**
無し。それが良かったりするのだろうか。寿命は50歳くらい(クナウザスでは回復手段も強いが病気も強い)							モデルは装で、個体差が激しいが、平均容姿そのもの。そのおかげで他種族に違和感なく混じれたのかもしれない。この時代にはまだ存在しないが、著述の原稿が現代だと、平均容姿などの関係で引き合いに出されることが多い。					
地球の超未来、地球人類は科学力によって自然環境を破滅させたが機械の中で生き残り、仮想現実にユートピアを見出し、『神』となった。そして、現実の地獄を世話する物として、無機物質から実験室の中で人間と同じ人工生命体を大量に作り、『天仕』として奴隷のように扱う。別次元に共時的に浮かんでいたクナウザス世界を発見した『神』は、その支配を目論み、自由を与えることを約束してこの世界を開拓させるべく、奇跡の子『天子』を派遣、中央大陸に超巨大大量転移建造物『天を突く塔』の建設を命じる。彼らは『人生』を得るために、クナウザスの生物群と争い、和解の道を見出す(入植戦争)。――この後、『塔』は封印され、天仕達は人者を名乗って住み着く。後の世界新暦ではこの辺りを元年とする。												
森者	バルダー	3	3	3	3	5	4	3	3	3	3	3	**36**
不老不死に近い。人口は多くても世界で数百人とされる。類稀な知性を持つ。天子は実験室版の森者というところであろう。この種は天使と天仕の子として、ごく稀に発生したようだ。							人者と同じだが、美麗な個体が多い。この時代には存在しない。					
天使と呼ばれる、異次元入植軍の半機械兵士が、天仕と交わって得たハイブリッド。天使には本来感情も生殖能力もなかったため、クナウザスの梵子的環境が作用したものと思われる。ちなみに、生物として子孫を残したいという欲求に魔族が付け込み、子を得たのは堕天使と呼ばれる強力な悪鬼となった。特例として、儀式を行っても森者の子を残せないので、森者同士で交わるしかないが、そうすると遺伝的に近縁すぎる問題が。不老不死にもかかわらず、種としては滅びる運命にあるのだろう。ゆえに古い者達は閉じこもりがち。												

※登場人物一部紹介

チャム・ザード
（人者、19歳、女）
カイが永い人生で唯一愛した人者の女性との間に生まれた愛娘。水の女神に預けていたが、父譲りの旅魂で飛び出し、踏破家に。未熟なりに、相棒のニルドと先輩の助けも借りつつ、その秘められた才能を引き出していく。

カイ・ザード
（森者、416歳、男）『伝える者』と呼ばれる伝説の存在。
かつてアガデスを救い、聖王国を建てた英雄伝の影の立役者で、タラム初代大導師でもあるが、本人はけっこう気まま。凄まじい梵子術の力は水の女神すら一目置く。三賢聖の一人。

フィル・ネゼス
（人者、31歳、男）元宮廷諜報官。自由に見聞を広めるため、踏破家に。物腰柔らかだが怒らせると怖いのは妹同様。ロンの大学をトップ卒業で、その術や学識は仲間を幾度も助けてくれる。

カーン・アルブ
（人者、30歳、男）元帝国黒騎士だが、アーテルの兄フィルと旧知の仲で、彼を通して踏破家になる。厳しい一人旅の中で死線を潜り抜けながら培った剣技はいつしか大陸中でも右に出るものがいないほどとなったが、恋愛沙汰には疎い。

アーテル・ネゼス
（人者、28歳、女）踏破家としても創世主教神官としても、戦士としても優秀な才色兼備で、多忙。ある冒険で出会ったユーリの才能を見抜き、踏破家業に引き入れた。

ユーリ・フォーシス
（人者、29歳、男）異世界から転移に失敗してクナウザスに迷い込み、数年前以降の記憶が一切ないが、気にせず踏破家として大成功を収め、自分の屈処屋を持つまでになった。心術と身体能力、判断力が並外れで、強力な個別系虚実体『一角獣の騎士』を操る。『準なる甲羅』のリーダー。

風変わりな常連候補生

ゆにあ

夕闇が、それを浸透させないはずの室内にも届きそうなほど重苦しく感じられる日というのがある。一日を決めるのは個人の意識と生活であって、日が落ちて今日一日が終る、というのは天球のまやかしでしかない（クナウザスでは天動説が正しく、天体現象は全て天の虚神の捏造である）が、特にもこうして世界が赤い偏光に満たされ、一般的にはもう明日を思案せずにはいられない今の際になってようやく、過去となろうとしていたその日が始まるということも少なくないのではないか――店内の水出しポンプの不調を直しきれずに苛立って蹴り飛ばした給仕、アードン・キリッチュミルはそのような感慨を店長に満足げに報告し、謝礼に相手のため息とお小言を頂戴した。

「全く君の哲学的な散歩を賛美するのにはやぶさかではないのだけれど、…キリッチュミル君、どうあったってあれは直さなければなるまいね。うちの水は…」

小間使いの青年がすでに、外界を照らしているであろう梵子的に時刻を表す光と同じ色となっているのを見て、店長と呼ばれた人者の若者は、もう一度ため息をつくだけにして彼を持ち場に戻した。飲み水に関していまさらくどくど言う必要も、そんな暇もない。現在、何と言っても急務で実物がほしいという事実がある。今のところ、水の変わりに安物のワインを出させているが、これではお客は満足し得ないであろうし、店のプライドにも関わるのだ。「カストール、悪いがここを頼む。いや、何でまた今日はこんなに…」

これも、言いかけてやめる。マスターのユーリ・フォーシスは現役の踏破家でもあって、かつての成功による財がこの居処屋（冒険家を生業とする踏破家のための総合的商売をする店）『泡沫の園』を構築しているのであるが、それゆえに一般人にはわからない部分で、客としての踏破家達のツボを押さえたサービスを捻出でき、また、地道な経理運営による利潤追求に少々疎い。だから、店が立て込んで、多忙の中から荒利が生まれることを、普通の商人のようには喜ばない。その分は彼の片腕、砂魚種族の業務主任カストール・ナザルスが切り盛りしてくれる。

ユーリは、げっぷをしながら大笑いする瘤の尖った体躯の剣士や媚びる女性客を軽い愛想でかわすと、出入り口の礎石を踏む。遺跡から『拾ってきた』自動ドアが、心地よい鈴の音を立てた。

本質的な言い方では、問題の機械はポンプなどではない。この穴の開いたブリキ缶のような機器は二対で一つであり、もう一つの方はフライロ大森林のとある泉中に設置されている。古代の梵子技術により、両機は常に同じ状態になろうと弱い力で努力する機能があるので、店の機械中の水が使用されて空いた分、泉側の機器から水が状態転移され、常に補充されるというわけである。ちなみに、都会の競合店どころか一般の飲食店でも、新鮮で滋養のある森の水を、無料で出すなどということを考える者はいなかった。『泡沫の園』が繁盛する理由は店主の型破りな発想によるところが大きいが、この水出機もその一つに数えることができる。

赤黒い陽光は頼りにならず、ユーリは小光機を歯で持ち、無駄と思えるほどに複雑な操作盤を、判る範囲で弄繰り回してみた。辺りはますます黒さを増す。暗さではなく、その日は黒と赤という色がユーリの心象にしつこく接したが、彼にはそんなことに一々煩わされる暇もない。と、彼は顔も上げずに、入店間際の客に声をかけた。常連は気配でわかる。そこまではいいのだが、おかげで明かりが落ちてしまい、舌打ちせずにはいられない。

挨拶を受けた方は立ち止まり、動かなかった。この機器が壊れたのは今日が初めてであるし、マスターの作業に興味を引かれたに違いない。

「参ったよ。水の代わりに何か出すけど…　すぐ直るからさ。…ああ、そうだ！　フィフレイン、うまく行ったんだろうね？」

ユーリは立ち上がり、聞きもしないうちから、手提げ袋を重そうにしている小柄の修道士の成功を称えた。辺りがくらすぎてフィフレインの表情はほとんど見えなかったが、彼は少し笑って、袋を無言で少し持ち上げて見せるのだった。店主にはそれで納得できた。すぐに上等なヤツをご馳走すると約束し、光を拾う。

再び彼は一人になって自慢の機械との格闘に没頭したが、咥えた灯火のせいだろうか、心なしか、先ほどより僅かに辺りが明るくなったような気がした。そしてすぐに、

何をしたというわけでもないが、水の平衡貯蔵機は何事もなかったかのように稼動し始めた。青年の不信もまた持ち前の楽天性でどこかへ追いやられ、早くに今日の殊勲賞を与えねばならない後輩の労をねぎらってやることにした。

ところで、フィフレイン・ベルツは踏破家団『破風の尖塔』のリーダーであり、種族はユーリと同じく猿がモデルの人者で、風の虚神の精神的従者でもある。まだ若いのに少し頭が薄いのが気になって、とんがり帽子でそれを隠している。彼のパーティはユーリの知る限りでは順調に5度以上の冒険を成功させ、最近では新しく女性術士を加えている。6日前に遺跡群（異次元人植期に建造された『天を突く塔』が爆破され、荒地に飛来したもの。部屋や階層の各々が独立した遺跡となった。）の一つを『仕入れ（業界の言い回しで、遺跡群の膨大な遺跡のうち、有用なものの位置情報と、そこに入ることのできる何らかのアクセス権を手に入れること）』、意気揚揚と出かけていったのであった。情報の出処が不明なことはともかくも、駆け出しの頃から面倒を見てやっているユーリは、出陣式がてらに上等の化鳥の姿焼きを振る舞い、一緒になって朝まで騒いだものだった。

青年は彼の肩を先輩らしく叩いた。今日はおごるが、今後は儲けた分でいろいろ軍備調達をしてもらうぞ、とか、他の4人がいないけど、それは他の店で飲んだくれてしまったからで、その上俺の店にまでハシゴをかけるとはさすがにリーダーの貫禄だが、しかし、一体お前達はウチを差し置いてどこの店と浮気しているんだ、とか、上機嫌で冗談とも本気ともつかぬ悪態を並べつつ、小使いに銘酒『小刻みの楼』を、自分と相手に注がせる。乾杯はほとんど音がならなかった。無理に相手の気分を盛り上げようとしていた店主もさすがに肩をすくめた。

「疲れてるか。随分飲んだな。ま、いいさ、ゆっくりしなよ。水の方が良かったな…」

「…いえ、良いんです。すいません、せっかくのお酒、開けさせてしまって…」

客がほとんど泣きそうな顔で謝罪したので、ユーリは驚いて彼を、陰の、喧騒から離れたテーブルに連れて行った。そこなら彼がより休まるのではないか、と判断したのである。

「こりゃ、英雄談をご披露いただくのはみんながすっかりアルコールという一種の毒素との戦いに打ち勝ってからだな、君を含めてね。部屋を用意させておくから、今日は眠っていったらいいさ」

「みんなは来ません。来れないんです」

ユーリは相手を気遣った笑みを半分顔に残し、頭を僅かに傾いで、真意を探った。

だが、赤黒い夕焼けに照らされていたときのように、フィフレイン・ベルツの顔は全く見えなかった。そしてほとんど口を開かなかったフィフレインがここに来て、とぼとぼと老人が当てもなく散歩するような調子ではあるが、途切れることなく話し始めた。

語り手によれば、探索は順調で、意味ありげに仕切られたいくつもの部屋を踏破し、特に、元盗賊のラペックが、これ見よがしに危険そうな串刺し針を上にした第2層の落とし穴を幻影だと見破り、そこから第3層に達し、この建造物の何たるかを忍ばせる製作者の碑文を見つけ、供えられていた数々の品を回収したことは本当に上々の首尾といえた。

遺跡自体に罠は多いがガーディアンそのものの数は極端に少なかった。話し手は意味深い文献に書かれた象形や使い方の判らない神具のことを嬉しそうに話した。踏破家の先輩にもそれは強く共感できる喜びであったが、何より後輩が元気を取り戻したようであることが嬉しいことであった。

「本当に大成功と言うべきでして。もちろん、おかしいと思うべきでした。ミキル君が蹴っ飛ばした何かの動物の骨とか、全く何の仕掛けもなく、台座の中央に宝だけがポツンと置いてある部屋とか…　マスター、今思うにあれは、いわゆる『物見不知』のいた跡じゃないんでしょうか？」

突然話を振られた方は、そういう可能性もあるな、とだけ言って、先を促した。台座に何物かの像が乗っていて、宝を漁るか指定の場所にさしかかると襲ってくるといった仕掛けは良くあるが、実際にその場を見ていないので何ともいえない。それに、先ほどからフィフレインではない、ユーリ自身には馴染みの声が彼の内面に何事か語りかけてくるので、話への集中力が減少せざるを得ず、横道に逸れてほしくないのである。

「…不意でした。あの翼を持ったやつらが、ドーム上に壊れた吹き抜け天井から舞い降りてきまして…　あいつらのしたことといえば、まず最初に金切り声を上げて僕達の五感を混乱させ、その隙に反吐が出るようなやり方で……じっくりといたぶるようにですね。ラペックとミキルが突っ込んでいって、でも、バルファは…

僕は、チャムを逃がそうと思いました。彼女はまだ新米だし、今回がまだ2回目

なんです、可愛そうじゃないかと。…ああ、でももう無理です。歯が、刃のよう…　なんです…！

　ところで、ラペックの絶叫だけは聞きました。後はみんなバラバラになりましたが、これもあいつらの分断作戦に違いないとすぐにわかりますよ。化物風情が頭だけは一丁前で…」

　聞き手は話の半ばにも到達しないうちにすっかり表情を曇らせてはいたが、相手に何か声をかけ、背をさすってやりたいと思った。が、内的な見えざる手がそれを頑強に押し留める。それならせめて、終わりまで話させてやろう…

「バルファのことは…　マスター、お気づきでしたか？　相手のことを考えない水商売の女でしたがね、…僕が心で見つめているのだって、あいつは知っていたのに…

　いや、そんなことはどうでもいい。3度駆け巡って、ちっとも出口に出れやしない。バルファの引きちぎられた下着を見つけ、その後、上半身を食いちぎっている、白く濁った肌の大きいヤツ…

　見ツケマシタ。あとの人たちのことなんか全然わかりませんし、ここだって、マスター、お聞きしたい、

　マスター！

…ココハドコナンデスカ⁉」

　突如、赤黒い血を滴らせ、骨の露出した腕がユーリを掴もうとしたが、激しい勢いで跳ね除けられた。先ほどからひっきりなしに警告を発していた、ユーリ・フォーシスを術者とする個別系虚実体（術者固有の虚実体で、これ一つだけですば抜けた一つの才覚といえる。心術召還に多い）『一角獣の騎士』が反射的に実体化し、自慢の長い脚で蹴りを一閃見舞ったのである。虚実体自身が『素梵子他象』による不可思議の物理力で構築されているから、相手が霊魂であろうともその衝撃を免れない。やり場のない怨念の塊と化したかつてフィフレインであったものは、理不尽な救済の願いを退けた相手に完全に牙を向き始めた。憐憫がユーリの得意とする先手を躊躇させた結果である。今はまだ店内の誰もが自分の熱狂に心を奪われているが、店が混乱することを覚悟で本気で当たらねばならぬ手ごわい相手だと彼は感じた。

　いや、一人だけ、店主の面する危機に気づいた客がいたようだ。アーテル・ネゼスであり、ユーリの数年来の仕事仲間でもあるこの美貌の女性は、つい先ほどに入店

し、店長が陰で、誰もいない座席に向かって何事か話し掛けているのを目撃したのである。彼女は聖なる神に仕え、邪悪や浮かばれぬ魂を善の名の元に救済する責務を自らに課していたから、相応の能力を持ち合わせている。一触即発の両人の間にゆっくりと分け入った、愛らしさの中に今は厳しさを称えているその横顔を、ユーリは文字通り女神のように感じ、油汗を拭った。

アーテルが自らの内面をデバイスとして偉大なる意志に語りかけ、憐れにもさ迷う魂の救済を願っていくつもの専門的な言葉を発すると、黒い影はうめいて司祭に挑みかかった。ユーリは慌てて虚実体を動かそうとしたが、アーテルが手で制する。彼女の念は堅く、亡霊の脅しには一切屈しない。まるで子供をあやすかのように彼女はてきぱきと除霊の儀式を終らせた。

「あいつらのパーティ名を考えてやったのはいつだったかな。ああいうのじゃ、まずかったのかな…」

無理に笑うユーリの手を、アーテルがひいて他の客が待つ酒宴場に導いた。

「あの時の子達よね。…残念だわ。でもね、きっと彼にとって、ここが…、あなたが、誰よりも頼れるし、自分の最期までの失敗とがんばりを、聞いてほしい人だったのよ。ちょっと話に夢中になって興奮しちゃったみたいだけど、悪気はなかったはずだわ」

ユーリ・フォーシスは、この長く青い髪を軽やかにカールさせた女性神官が古式創世主教会に属し、それがヒロア国教の得意とする邪悪を抹消させる術を使わず、あくまで霊魂を慰めて成仏させることに主眼を置いていることを幸いと思い、アーテルがこの場にいてくれた幸運と、彼女に感謝した。

そこに、何も知らぬウェイトレスの少女、南国出身のニ・メア・ヒースが明るい声で笑いながら、虫者の利点を活かし、一度にたくさんの料理を運んでくる。事情を察したカストールが特別に振舞ったのである。創世主教では、弔いの際には黙せず、故人と一緒のつもりで、馳走や杯を空にして楽しむ。ユーリは無神派だが、今日は司祭殿の流儀に従うことにした。付近の乗りの良い客が次々とこれに参加し、店閉まいの曲は深夜まで鳴らなかった。

四方の壁に異界の宗教を忍ばせるタペストリーが掲げられ、それらは一つの終わ

りなき物語を永遠に奏し続けている。この箱のような部屋に、二名、人者と思しき男女がいる。冗談にも逢引の光景に見えないのは言うまでもないが、女の方はまだ若い、ほとんど少女といっても良い風采で、まとめていた赤い髪を、簪を落としたのであろう、ばさばさに下ろしていても全く意に介していないことからも憔悴の色が見てとれる。男も背丈に似合わず幼い表情だが、うずくまる同室者にかまわず、五歩で壁から壁に移動しきれるような狭い部屋をうろうろと歩き回り、ときおり壁絵を拳で何度かたたいたり、レンガとレンガの隙間を覗こうとでも言うかのように顔を近づけていた。

この青年は腰に小さな十字の飾りをつけている以外はほとんど裸で、薄く透ける布を申し訳程度に体にふわりと巻いていたが、彼の不思議に澄んだ眼差しはそのような風体すらごく自然な印象に変えてしまうようだ。

ところで、この部屋の様子をうかがっているものなら誰でも、彼の妙な行動によって、まず先に注意を喚起すべきだったことに思い当たるだろう。この部屋には扉が一つもない。彼等の状態から察するに、牢屋か何か…、とにかく、閉じ込められているのではなかろうか。

「…君、チャムといったね。どうも閉じ込められたみたいだね、僕達は」

呼ばれた少女はそれを聞いて少し頭を上げて青年を見上げ、がっくりと前より深く頭を垂れた。新参の観察者である我々ですらわかったことを、長い時間をかけて無言でうろついた挙句の結論として改めて提出されたことに対する自然の反応である。彼等は少なくとも丸1日はこの部屋にいる。青年はマイペースだが、少女のほうはしばらく何も食べていないし、酷く疲れていた。体中に擦過傷やもっと手ひどい傷もあり、埃まみれで、革の輝きからしてまだ新品同然であろう装備品も、ところどころが無残に裂けている。それでも緊張が、負傷者が癒しの眠りへ向かうことを阻害していた。

「どうでもいいけど、あんた。名前ないの、呼びにくいわよ」

「じゃ、ニルド、でいいよ」

「何よ…　あるんじゃないの」

憮然とし、少女はお尻の埃を払って立ち上がった。そろそろ疲労困憊による苛立ちが極限に達し、青年の頼りなさに我慢ができなくなってきたのである。

「ああ、僕の名前じゃないんだけどね。記憶には、僕の『作戦コード』だと『書い

て』あるんだけど。君は嘘をついていないだろうし、つく必要もないから、君の言うことは正しいと結論できる。ということは、僕の作戦は、実行されなかった…。作戦がなければ、何もなし、だ。だから僕には名前がないし、作戦コードも必要ない。それで流用しようと思ったんだけど、いけないかな。僕はまともに覚えていること、つまり、記憶に書かれていることは、この単語と大まかな状況整理システム以外にはないわけで…」

半日前にチャムがこの青年と偶然的に出会ったとき、彼は開口一番、必死の彼女にはどうでもよいようなこと、例えば世界の情勢とか歴史の大まかな流れとかを尋問するようにしつこく聞いてきた。代わりに何か話してくれるのかと尋ねてみても、ほとんどの返答が『わからない』という短い語句か、脈絡のない話ばかりであった。

「何度も言うようだけど、わけわかんないわよ、あんたの理論。…もういいわ、ニルド、あんたは元気みたいだけど、あたしはそうじゃないの。もういちかばちか、壁を吹き飛ばしてみるしかないわ。あたしだって何もしてなかったわけじゃないのよ…」

チャム・ザードはまだ経験の浅い術士ではあるが、分不相応に強力な術をいくつか師に伝授されている。休息でかきあつめたなけなしの術費を使い、危険を覚悟でそのうちの最も破壊力のある術を行使し、壁の、およそ通路に繋がると思われる場所に風穴を開けようというのである。だが、そのような目星はなかなかつけられたものではないし、青年の漫然とした探索の収穫にはもちろんそのような都合の良い発見は入っていなかった。チャンスは一度きりであろうかと思われた。少女は、自分の実力より遥かに高いレベルのデバイス言語を詠唱しながら熱操作系の梵子術を構築していく。そうした中、脳裏には、幼少の頃から術の手ほどきをしてくれた先生でもある実の父のことが描かれていた。

『お父さん、あたし、だめかも… 迎えに来るまで絶対外に出るな、っていわれてたのにね。

でも、あたしだっていつまでも子供じゃないんだよ…！』

撃ってみる前から絶望の涙で目がかすむ。声が震える。少女は避けられぬ死を目の前にして、自らの軽はずみが散らそうとしている青春の喜びをも想像し、胸が張り裂けそうだった。梵子術は念をデバイスとするが、念とは精神の活動であり、それに

何がどのように作用するかは言葉で説明できるほど容易い現象ではない。ネガティヴ思考がどのように作用したものか、一刻後に発動した術は師が見ていればその無謀を怒れなくなりそうなほどに満点の結果をもたらし、放たれた爆光は……――爆光は――宗教画の、くびきに繋がれた人々がとめどもない螺旋階段を降りていく様子が描かれている部分が強烈な爆撃で砕け散り、おあつらえ向きに進路が切り開かれたというのに、それは定められた運命を急かすだけのことであったのだ。チャムは後ずさりながらもう一度術を使おうとしたが、たちまち眩暈で膝を突く。

温室育ちで世間知らずの少女を快く受け入れてくれた4人、知り合ったばかりの優しい先輩達を殺戮したものが、爆音を聞きつけて穴に手をかけ、こちらを濁った眼で見ているのだ。そして間髪いれず、獲物を見つけた狂喜の、犠牲者の心を凍りつかせる雄叫びが上がった。そのせいで、もう一匹も遠からぬ位置より近づいているようだ。

鋭い爪が動けぬ少女を串刺しにしようとした。チャムは叫びを上げることすらできず、目を閉じてうずくまる。グシュッ…　肉の裂ける音が静寂を呼んだ。

「…？」

獲物も狩人も何が起こったか、すぐには理解できない。…ニルド青年が、鈍い光を放つ、いや、光そのものである細身剣で怪物のわき腹を突き刺しているのだ。どこから取り出したかは、その剣の柄が、先ほどまで腰についていた品であることを伝えれば、少々は踏破家として成功に憧れ、有名な戦利品の名を論うことのできる者にはわかるであろう。もちろん、『如意剣』と呼ばれる神具（クナウザス由来でなく、異次元の超科学由来の虚品など）の一種なのである。

青年はゆっくりと剣を引き抜いた。人型をしてはいるが、大柄で屈強なこの怪物にはそれほど効き目のある一撃ではなく、せいぜいびっくりさせてチャムを僅かの時間だけ救ってやったようなものである。怒りを顕にした怪物自身もそう思い、多少なりとも邪魔な方を先に片付けようと向きを変えたところで、その意識は死の闇の中へ消えうせてしまった。ちょうど駆けつけてきたもう一匹が悲痛な叫びを上げ、血が焼きついて滴っている光の刀身を持つ青年に血走った復讐の眼差しが注がれる。

ニルドは剣を頭上に掲げ、祈るように眼前の白い肉食動物を見据えた。

「君の兄弟だったか…　ごめんね、何となく弱点がわかってしまうんだよ。

君たちとはどうやら話が通じそうにもないし、チャムは――僕の今のところの、

たった一人の知り合いを大事にしても誰も異存はないと思うんだけど、この人は、外に出て何か食べないと死んでしまう。僕だって、いずれは…

そう、生死の境、生物の根本的な位置に僕達はいる。そのとき、争いと敗北による死は、避けられぬものゆえに、美徳となるのだ。主よ、我に力を…」

「何言ってんのよ、あんたっ！　きゃああっ！」

怪物の猛烈な突撃と共に発せられた絶叫と、チャムの悲鳴が交錯した。一人、ニルドだけはほとんど構えもせず、不動の体制のまま…

「あっちだ、間違いない！」

ユーリ・フォーシスをリーダーとする踏破家団『純なる甲羅』は生存者に一縷の望みをかけてひた走った。すでに彼等は3人の遺骸を回収していたが、絶望的とはいえ、最後まで残りの二人をあきらめるわけにはいかなかった。フィフレインの亡霊の件があったとはいえ、栄光の代わりに死と隣り合わせにある踏破家にとって、どんなに無残な死であってもそれはあくまで自己責任の範疇であるから、このように誰かに遺跡内での死を認められることだけでもささやかな幸運であったといわねばなるまい。

武装を軽くしていた剣豪カーン・アルブは、いつもは遅れを取ってしまう身軽なユーリと競うようにして走り、リーダーが指し示した堕天使――黒い魔獣の翼が生えた白い体躯の人影の正体を見抜くなど、彼等には造作もないことである――に向けて、遠隔攻撃の居合切を放った。彼の大陸有数と言われるほどの実力が可能とする、梵子術的な剣技であるが、全力疾走中なので、威力はほとんどそがれている。それでも、怪物の注意をひきつけ、襲われている者を救うには十分である。怪物が振り返り、4人の新手を値踏みするように交互に見た。壁の穴付近に群がる怪物の数も4体である。

「うは、こりゃ…　成体もいますね、こんな大きいのはなかなかお目にかかれませんよ。貴重です」

こう言って術の詠唱に入ったのは、アーテルの兄、フィル・ネゼスである。チームの知恵袋であり、冷静で温厚な潤滑油でもある。フィルの術も梵子エナギーの弾丸を数発適当に飛ばし、怪物どもの対象がいると見える穴から遠ざけようとした。もちろん生存者などいないでしょうけど、とフィルは思ったが、一人でも多く助けられる

と本気で信じている妹の手前、さすがに口には出さない。

堕天使も対抗して攻撃用の術を放ったので、ユーリ達は身をかわして分散した。とてもではないが、怪物を追い払わなくては、彼らが群がっているところに転がっているであろう犠牲者に、治癒術を施すことのできる司祭を派遣することなどできそうにもない。ユーリは『一角獣の騎士』を呼び出し、カーンとともに躊躇なく敵に突撃した。無論、二人の術者の後方援護を期待してのことであるが、それにしても、強力な怪物である堕天使の正体を知りながらそれと正面からぶつかったとしても無謀と言われぬ真に実力派の踏破家が、世界でどれほどいるのだろうか。いずれにせよ『純なる甲羅』は間違いなくその中の一つに数えられるべきで、彼等にとって策はあってないようなもの、何をすべきかは各自が判断し、それが最善の総意となる。

そこに、ほっそりした若者、もちろんニルドなのであるが、今まで一人で、増援が出たにもかかわらず何とか敵の攻撃を凌いでいた彼が、これを好機として穴から這い出して前衛の二人に加わったので、カーンは少々ぎょっとして動きが鈍り、怪物の噛みつきをしたたかに受けてしまった。堕天使4体を相手に生きているような者がいるとは思っていなかったのである。ユーリにしてもニルドのことを知らないだけに、彼の独特な、無機質的な剣さばきに心を奪われ、今、危険な戦いに身を曝していることをしばし忘れそうになった。

とはいえ、さすがのマイペースなニルドも、ユーリ達の足音を聞いたときは怪物の更なる追加だと勘違いし、冷やりとしたものである。新手が怪物と争い始めたので、まずは味方と考えるしかないし、もしそうでなければ一巻の終わりなので、後者の選択肢を考える必要はないと彼の少々機械的な判断基準で思考し、即行動に移したのである。彼も傷だらけであったが、モノは見かけで判断すべきではないという典型例で、何らかの特別な品なのであろう、布切れが装備者を致命傷から必死に護ってくれていた。

ユーリは持ち前の素早さと機転を活かし、さらに虚実体の特殊能力――『一角獣の騎士』の戦闘力はそれほどでもないが、現実の事実を僅かに捻じ曲げたり入れ替えたりの、『次元捏造』を行える――で敵を一気に翻弄し、陽動した。その間にカーンとニルドの剣が確実に怪物を、各個撃破で消耗させていく。ついに多量の失血で動きの

鈍った小柄の怪物が剣豪に胸を切り裂かれ、断末魔の悲鳴をあげた。残りの3体は形勢不利と見て通路の奥へと逃げ去ったが、別に退治の依頼で来たわけでもない一行は、それを見逃した。

アーテル・ネゼスはニルドを癒そうとしたが、彼はそれを断って穴の奥を指差し、チャムを先に助けるように願った。すぐに彼女には水と食料、応急手当が施され、彼女の話からあともう一人の死亡がほぼ確実となった。

何度も言うようだが、純なる甲羅だからこそ渡り合えるのであって、彼等にとっても、例え手負いであろうとも堕天使は油断のならない相手である。救出者達は、無理に探索を続けるより、負傷者を外に連れ出すことが先決として、拠点へ引き返した。宿の暖かい布団の寝心地は強力な睡魔を召還し、仲間を失って自分だけが生き残ってしまった辛さに改めて慄く少女も、その魔法には全く歯が立たなかった。

ヒロアという国を語る上で、その豊かな市街地を、少なくとも首都フィランだけは外すことはできない。祝日ともなれば栄華を誇り、女王と創世主の威徳を称える様々な歌曲が街角を流れていく。発展著しいとはいえ、この国の経済がロンのように殺伐とした営業戦争を試みず、牧歌的なアガデスの雰囲気を受け継いでいることは、仲良く――と、資本主義的な文明には皮肉られそうであるが――切磋琢磨でサービスを競うカフェにも、仕事より祭儀を大事にする国民生活にも、見て取ることができよう。

遺跡群から度々這い出てくる脅威に脅かされていた小村が、災い転じて福と成し、踏破家相手に潤って大都市となるに至ったメラモに行かずとも、遺跡群絡みの仕事は国内で最も現地から遠い首都でも決して少ないものではない。それは、ここに遺跡群の調査を欲する中流以上の市民が多く住むからであり、メラモが宿場町としての利点を持つなら、フィランは客に、しかも高額報酬の期待できる層の依頼に、――旅費などの経費も支払われるのが普通だから心配は要らない――接する機会の多い都市なのである。このため、専ら遺跡群を目指す踏破家であっても、付近の街だけに留まらず、首都を拠点とする者も、居処屋も多くなる。

控えめにも郊外の西郡地区に出店した『泡沫の園』であったが、先にも事例がいくつか述べられたように内容的には群を抜いていたから、経済の競争に関する多種の

保護条例の存在にもかかわらず、ライバル店は戦々恐々といった感を得た。ところが、店主の方針がヒロアの傾向と良く遇合していた。連日連夜、自分の店に客が溢れかえって理想とするサービスがおろそかになることへの危機感を感じたユーリ・フォーシスは、客の多すぎるときは入店規制をかけて付近の同業店を紹介することもした。そのうち、店が市街中心にあるわけでもないので、客足は落ち着き、普通の店なら贅沢すぎると叱られてしまいそうな悩みは解消したのであった。

落ち着いた生活空間のあるヒロア聖王国では、だからといって店が極端に痩せることはない。目の肥えた常連がつき、常に新しい客がある程度出入りする。彼等は風潮だけでなく、自らのポリシーと好みでもって受けるサービスを決めることのできる水準の高い消費者であるとも言えよう。これがロンであったなら、そして、店がその競争に積極的であったなら、付近の店を食い散らかして肥満体のように膨れ上がったことだろう。持ち前のサービスがどのように変遷していくかも、その後の活動と運に賭けられる。しかしこれが、あまりにも質素を尊ぶ昔気質の隣国なら？　はたまた戦後復興に苦しむ帝国なら…？

ユーリもそうやって、自分の店を出し、夢の達成の道筋における一つの区切りをどこでつけるかを思案したものだった。ロン公国がそもそもの拠点だった彼の選んだ地は、そういった意味では、中庸を得ていたのであろう。

もちろん、サービス業という、どこか平凡を思わせる職業は、ユーリ・フォーシスの半分にも満たない。彼の本質はあくまで初志のままであり、彼の発想がその枠組みだけでは収まりきれず、自分たちにサービスを与える職業までも抱え込み、より大きな視野で活動できるように欲したのである。

当然、ユーリを中央大陸の北西部に導いた理由にはそこが出店に相応しいというだけではなくて、整備され、開墾された田園都市から離れ、マリフィピー山地を目指して南下すれば自ずと視野を虜にする破壊された建造物の残骸――この、遺跡群と呼ばれる、かつて一つの巨大な建造物であったというにわかには信じがたい曰くを持つ古の都市のごとき範囲を、他の踏破家同様に一つの目標として据えたことを捨て置けはしない。とはいえ、ユーリの場合はこの遺跡群の少々あつかましいとさえ言えるほどの魅力を持った『遺跡団地』に吸い寄せられたということもあるのだが、むしろ、

安定して自由な社会情勢、多くの魅力ある探索スポット、世界の中央という地理条件という三点において、必然的に中央大陸西北部が踏破家の聖地となっているからこそ、ここに集まる多様な客を相手にすることの意義深さをまで、感じたのである。

ところで、ほんの1年前、別に『泡沫の園』をひいきしているわけではないので二番煎じとまではいわないが、話題の拠所屋のような奇抜なサービスを用いる店が一時増えたことがある。しかし、それらは開店当所以外はちっとも流行らなかった。ヒロア国民は伝統的スタンダードの微妙な感覚を愛好する傾向があるといわれ、ユーリ・フォーシスの店が得たその点を射止めることは、並大抵のバランス感覚と幸運が働かぬ限り、難しいらしい。何事も、最初に行うことが難しく、また、容易でもあるのだろう――

べた褒めしておきながら突き放すようであるが、『泡沫の園』でも閑古鳥が鳴かぬわけではない。カイ・ザードがふらりと訪れたときもそうである。昼下がりの店内で頬杖をつく店主と対照的に、この機会に入念な掃除をすませておこうと躍起になっているメアをこの新客は見た。

カイ・ザード。世界に多様な人々が住むといえど、この名を聞いて、昔話に聞かされた英雄を連想しないものがいるだろうか。面白い名前だな、まるで…　と、初対面では話題の前振りになって便利かもしれない。無論誰でも、目の前の男が数百年前よりの伝説上の人物その人であるなど、なかなか真実味をもって受け入れることは難しいのだ。ところがそれでも、彼は伝説と実歴に語られるところの『伝える者』であって、齢はすでに四百を越えている。そういう存在が我々の主人公の運命に接近してきたというのも、いかようにも動かしがたい事実で致し方ない。

「人探しですね、顔に書いてある」

カイは店長の問いには曖昧に答え、地ビールと肉料理を注文した。調子の良い若者にしか見えない青年が漂わせる感の鋭さと雰囲気から彼の実力が見かけ以上のものであると感じたのと、エンドレ・マー調理長の愛情篭った家庭風料理を気に入ったので、カイ・ザードはここになら『依頼』を安心してかけられると確信した。カイは家出をした一人娘を探していることをマスターに手短に伝え、念写で羊皮紙に投影した肖像を手渡し、報酬などの細かい話に行こうとした。と、ドタドタと裏手の階段が音を

立てた。もうすっかり元気を取り戻したチャムである。

「思いついたんだよ、ユーリ！　え、窃盗犯のことよ、昨日受けた依頼の…、もう何、忘れたの？　ほら、ワクルイ家の娘がいたでしょう、あの私みたいに髪の赤くって…あ、お客さんなの、ごめ…　…　…　…　えぇっ…?!」

チャムは思わず飛び上がってユーリの腕に絡みついたが、同じく開けた口と目を丸くした新客の方は、そのまま、少女の深い意味のない反射行動で眉根を潜めたので、良い男が台無しになるほど奇妙な顔をしてしまった。

「チャム！　お前…　なんだ、なんでこんなところに…」

「え、お知りあい？　ということは親子の再会かぁ。あいや、依頼は早速果たされてしまったのですね、手数料かキャンセル料くらいはいただけるのかな…？」

「うわわ…　お、お父さん…」

挟まれたユーリは軽口を無視され、苦笑いして一歩下がった。妙な誤解も解きたいと思ったらしいのだが、逆効果で、すっかり固まってしまったチャムは彼により一層しがみつき、一緒によろけた。

「お前、まだ男と付き合うのは早いだろうがっ！　おまけに一体なんだ、その格好は…、まったく、メシャドの言っていたとおりだ…」

カイはペタリと椅子に座り込み、踏破家風ではあるが身軽と洒落を好んで露出度の高い装備の娘と店長を交互に二回ずつみて、まぁ、好きにしろ、と目を伏せた。雷が落ちるのかとひきつった笑いを浮かべていたユーリとチャムの反撃の番であり、彼等の必死の抗弁と父娘の離れていた時間を埋め合わせるやり取りから、我々はあの小さな悲劇と出会いが『泡沫の園』や遺跡群北西部の崩れかけた遺跡で起きた辺りから今までの約2ヶ月間、何が起きたのかを間接的に知ることができよう。

『破風の尖塔』に入団するまで、実の母を物心付く前に失っているチャム・ザードは、ヴァサークローネの虚次元空間で水神メシャドのお膝元で暮らしていた――そのこと自体も淡々と述べるような小事でないことはわかっているが、この方が、既に『伝える者』が登場している今、多くの物事が半ば常識を超越しはじめていることがかえって伝わるのではないかと思うのである。――『生神』と呼ばれる水の虚神が住まう高次元の透写世界では完全な安全と安定が約束され、時間が主観以上の不可逆的な

振る舞いを行わなかったから、彼女はまさにぬくぬくと温室で育てられたようなもので、人者にして百年以上を生きているにも関わらず、未だ少女同然なのである。

だが、世界を旅し、ほとんど帰ってこない父の性分は確かに娘にも引き継がれていたから、チャムは育ての母である水神メシャドの側近を並々ならぬ熱意で根負けさせ、外の世界へ飛び出した。憧れを引き出したのが自分の血と土産話とあれば、父の怒りが不完全燃焼であるとしても不思議ではない。

二回目の冒険で窮地に追い込まれた彼女は遺跡内を闇雲に疾走したが、天運の虚神が彼女をまだ見ていたいと欲したのであろう。迷走の末にたどり着いた一室には絶好の隠れ場と見えるいかめしい構造と透明な管がいくつも絡み合った棺桶――と、彼女は感じた――があったので、チャムは藁にもすがる思いでそれを開けた。

後にカイが現場を検分して推論したところによれば、本来はいくつかのスイッチを押し、パワーゲージのレバーを調整するなどの手続きをして自動的に開かせなければならないのであるが、何かの微小な生物、例えば『台慣（ウナナラシ。微小な機械生物の一種）』みたいなやつが長い時間をかけて重要な部分を噛み千切ってしまったので、ロックが外れていたとのことだ。蓋が開くと、中にコールドスリープさせられていたニルドが起き上がり、父との再会よりも強い驚愕に身を竦ませた解放者のことなど意にも介さず、棺から出て、挨拶代わりの質問をぶつけてきたのである。

「言葉は…　お前は（と、カイは娘に話し掛けた）ニルド君が最初は何を喋っているかわからなかっただろう。何、覚えてない？　まぁ、無理もないが。

…彼には本来、システム的に起動させられた際に書き込まれるはずの人生の図面が、正しい手続きを取られなかったために、まっさらな状態で覚醒したのさ。

君（ニルドはチャムの父親に、最初から親しげにもこのように呼ばれた）も自分で把握しているとは思うが、緊急事態に対処するための初期状況整理エナギー、…まぁ、いうまでもないが、俺たち人者を創りだした異世界の連中は、どんな単純な物理素子であろうともまるで梵子か物質のごとくに取り出し、集めたり目的を書き込んだりして利用できたわけで…

もちろん、これらは俺の単なる推測でしかないが…」

「そういったものが稼働したことで、チャムさんのいくつかの言葉だけでニルド君

は我々の言葉と基本的な常識までを『推測』し、瞬時にマスターしたわけですね。前世の記憶のようなものですか。いろいろなものが本能のように書き込まれていて、環境に即座に適応するために感応した必要な情報だけが、梵子無しで知識と精神に描きこまれるということが本当にあるとしたら…　とてつもない超科学だ…」

『純なる甲羅』にチャム、ニルド、カイを加えた7人によるニルド生誕遺跡の再調査が終わった後の打ち上げ会のことであるが、オカルト研究に熱心なフィル・ネゼスが目深くかぶった帽子を取ってカイの解説に彼らしい注釈を加えたので、輪廻転生を否定する創世主教司祭の妹は思わず顔をそらして天井を仰ぎ見た。彼のような識者は『科学』という言葉に比較的親しいが、その言葉の意味は我々地球人の物理学的な法則を解き明かして利用する技術ではなく、むしろそれらの下位産物であったり、それが排除するようなところの不可思議性、因果応報や別たれた運命の中間といった曖昧な要素、すなわち梵子に関する技術と知識を指す。

ところで、判明したことは本当に驚くべき、謎多き人者植民に関する歴史のベールを一つ解き明かすような事実であった。ニルドは、かの植民軍のリーダーである『天子』と呼ばれた最上階級として造られたらしく、現役の指導者が万が一倒れたり反乱したりしたときのために、いわば代役として一応用意しておかれたものらしいのである。どのような技術的超越と奇跡が彼を創出したかを解くことは、クナウザス世界そのものが下位次元で捻出された下等な技術観念との交わりを決定的に絶たれて久しい現在、完全な意味で不毛なことである。だから、およその意義がわかればよいし、梵子理論の学術ではそれこそが命題となる。

ともかくも覚醒した青年には、かつて何らかの理由で彼を作ったであろう者の命令が届かなかったし、新たに入力される情報もなかったから、彼は彼だけの精神と存在意義を自らのうちに目覚めさせ、探し出す『人生』という長い旅にこぎだしたことになる。もし命令が滞りなく発し、彼がこの世界の住人に対して敵意を抱くようなことがあればチャムの運もそこで尽きただろうけれども、そうはならなかったし、彼を目覚めさせ、最初の知り合いとなった彼女は、彼にとって純粋に親しむべき存在となったのも無理はない。ニルドは少女の言うことを素直に聞き、共に脱出を図ろうとした。その結果は、周知のとおりである。

先に2ヶ月経過したと申し上げたが、『伝える者』が娘の保証も相まって本来的な名声をもってしてユーリ達に受け入れられた頃――そもそも、純なる甲羅も踏破家の憧れの的といった存在であるから、稀なことにもそれほど驚かないのである――娘の活動基盤がヒロアと『泡沫の園』に落ち着いてしまっているのを見てとったカイ・ザードもその周辺をうろうろするようになり、常連の仲間入りをするのには、さらに1ヶ月とかからなかった。

この父は放任主義を気取り、娘が死の危機に落ちたことを聞いても、ある個人が勝手にしたことで、どうとも思わない、という態度を取りつづけた。しかし、生活に縛り付けられる生存の制約から放たれている存在とはいえ、娘を近く遠くと見ぬ振りをしながら見守りつづける彼の無意識的な過保護ぶりは誰の目にも明らかで、店の者はそれをほほえましく、同じように見てみぬ振りをするのが慣例となった。

「嬉しいのよ、カイさん。あなたが一人立ちをしたのが…」

これが、いまやチャムの姉貴分となったアーテルが、『鬼武の小躍』をわずかに舐めただけで酔っ払い、父が自分を未熟者だと罵ったり、より高位の術をもう全然教えてくれないことについて愚痴るチャムを宥める常套句となっている。

もうここ三日も、童顔のニルド青年は高熱を原因として寝込んでしまっている。原因は風邪らしい。少なくとも昨日診た新教の坊さんはそのように結論付けたし、およそ世の中に知らぬことなどないであろうとすら言えそうな『伝える者』の過剰なお墨付きをもいただいているのである。前者は、すぐに直りますよ、と薬を処方して帰ったが、しかし後者はそれに比べるとかなり神妙な顔つきになっていた。

ニルドをチャムの同伴者として認めること――現実的な問題だけでなく自分のプライドからも娘の一人立ちを対外的には認めざるを得ず、かといって危険の渦巻く世間の荒波に愛娘を一人で放り出すわけにもいかないという、密かなジレンマに陥っている父親が出したその結論だけが、彼の心配そうな表情の理由ではないのだが――ところで、なぜニルドが適任者とされたのかについては、この青年の人となりを見ていれば自ずとわかってくることではある。

まず彼は容姿に見合ってとてつもなく無邪気であったが、それでいて冷静で胆力

があり、かつて天子となるべくして与えられた高い基礎能力と潜在能力は踏破家の厳しい技術要請に全く億尾を見せなかったし、少々感情的、常識的な要素に欠けるところはあったものの、それは、まだ自分の人生を歩んでから間もないのだから致し方のないことでこれから身に付けていけば良いこと――何より、娘の友人、ボディガード、男除けとしておくには、その特殊な出会いからも、推奨の難しいことではない。そしてチャムをいつまでも自分の手の中に入れてはおけないことに気づいた彼は、それゆえに親らしい、陰謀にも近いようなもっと発展させた狙いを抱きつつあったから、この二人が今以上に仲睦まじくなろうとも、決して目くじらをたてることもないのである。

そのような父の考えも窺い知らず、両親から譲られた数奇な運命を受け入れつつ乗り越えていく才質をその脳天気さに表現しているチャム・ザードは、間もなく挫折から立ち直り、それを教訓として間違いなく未熟なりにも一回り大きくなって、ニルドと二人だけで、自分達にできるような仕事を見つけて、無理せず、一つ一つを着実に成功させていった。最初こそ目的を与えてくれるチャムに付き従っているだけのニルドだったが、段々と世の中のことや自分の人生を歩む楽しみを覚えていき――自分の出生を後悔したり、他人のように生きたいと悩んでいる方は、彼と飲み交わして話せば、他ならぬ自己を持って生きていられることの幸いを再確認できるかもしれない――踏破家として積極的に仕事をするようになっていった。

様々な能力を持った者たちで力を合わせ、障害を乗り越えていかなければならない踏破家業ではあるが、少人数の身軽さや収入面での利点を活かし、ペアや独力でやることもそれほど珍しくはないから、新たな後輩にせがまれ、ユーリは喜んでチーム名を与えた。彼の店としては客に段階的な差別をつけるわけではないが、この二人は新参ながらも、特殊な事情も相まって特に親しい常連となった。このような恵まれた環境にあったから、ニルドの思わぬ欠陥、彼のほっそりとしてはいるが見かけ以上に精強で健康的な体躯に全く相応しくはない病弱な性質も、周囲の見守ってくれる識者にはそろそろ偶然とも思えなくなってきたのである。

ここで、アーテルの兄が一つの仮説を、彼の知識と最近の研究の中から案出した。フィル・ネゼスはアルコールを嫌って水だけをうまそうに飲むので客としては優秀

な方ではないにしろ、『純なる甲羅』に属する前からインテリだったし、踏破家業で成功を収めた今では学術研究を本職とし、農園の片隅に構えている静かな別荘とタラムとを月単位で往復するようであったから、その道では優秀さに磨きがかかっている。この幅広い知識を持つ学者によれば、ニルドは単なる奴隷として創られなかったから、本来、覚醒時に『機器』から大量に病原菌への抗体が導入されるはずであったが、それが成されなかったので、一般的に親から抗体を受け継ぐ人者よりも病気に弱いのではないか、というのである。これが正しいとすれば、今、風邪で済んでいるのがもっけの幸いというものである。

身内的な感情による好意によって、ただちに然るべき処置がなされた。かつて人者の植民軍をこの世に送り込んだ巨大建造物の名残から生まれたニルドの生命を救うには、そこにこそ、何らかの対処法も隠れていそうなものである。義理の父親のような立場にあるカイはそのように提案し、フィルに遺跡群にあると思われる医療系の機器を探すことを依頼した。1週間後、フィルは断片的な情報と知識を合わせ、偉大な研究家の見取図上で『月児の裏側』と名づけられている中規模の遺跡がある座標を目標とすべきであると提案した。いくつかのパーティがこの遺跡に関わる周辺を探り、そこから得られた情報が、『月児の裏側』に『上位種』のメンテナンスを行う一室があるということを示していたのだが、肝心の鍵がなかったために今まではこの遺物が知られざる神秘より脱することはできなかったのである。

鍵は『合言葉』であった。フィル・ネゼスの活動に、伝説上の人物に生きながら数えられる者の知性も加わって、この度、ついにそれが発見されたのである。――フィルは純粋な知識欲に身内心を加味して生活的余裕を消費したのであるが、カイ・ザードはこの働きに相応の報酬を支払っている。なお、この件を契機として、以来、知的な面で彼等の交流は控えめながらも着実なものとなる――

ヒロアの都会では、まだ暦の上では冬に該当するというのに、もう外套を着なくても良くなってしまったといった誤解が流通している。日陰に溜まった僅かの残雪がとるに足らぬ片隅の土壌にすら足元の小川や沼地を作り、新鮮な春の空気と一緒にきらめいている。寒さと雪は踏破家業にとって多くの場合効率を悪化させる要因となるから、このような不定の気まぐれ的な日々のせいで、早速仕事始めを行ってみようか

という冗談めいた気分が本気と相まって、あちこちで出立の準備が起こり、急がれた。その翌日に大雪で行路が寸断されても誰にも文句は言えないのだが、自然環境の支配に常々から屈しているようでは、自由を尊ぶ踏破家業の名折れといったような蛮勇は、ユーリ・フォーシスにも理解ができる。彼の店も例外に属せず、忙しくなった。『純なる甲羅』はメンバーのそれぞれが思い思いに人生の夢をかなえて仕事に励んでいたから、基本的にはリーダーが呼ばないと動くことはない。そこで、最も効率よく、危険を最小限にして患者を診療所へ運ぶための仕事は、不特定多数の集団に委ねられた。

踏破家ならば刮目せよ。『泡沫の園』のフロア中心の円柱にかかった掲示板、目を引くネオンの中で踊り、君達を然るべき場所へ誘っている活字で構築された依頼文を。普通は板か紙で済まされるはずのこの道具自体、かつての超越的かつ荘厳な古の梵子技術か異次元の超科学の産物であり、踏破業の成功がもたらした戦利品であって、その英雄の一人に生きながら数えられているユーリ・フォーシスの取得物である。人気店ゆえに表示されている仕事の数は常に数十種類、今また下記の依頼が追加されている。

遺跡群座標…6-14-5『月児の裏側』
探索し、『上位種メンテナンス室（仮称）』までの道のりを確保せよ。
依頼者…カイ・ザード　　報酬…7800

依頼者は世界そのものが住処のようなもので、局所に定住することは永遠になさそうだし、大量の現金を持ち歩くような性分でもないが、何かが必要なときなどには、所持品の一つである『別腹の臍』という小袋に手を突っ込むだけで良い。機能的な素晴らしさに見合わずこのみすぼらしい袋の口は時空を超越した空間に連結されており、口に入る程度の大きさの品物なら無限にものを入れ、半永久的に保存し、いつでも好きなときに用意できるのだ。この袋から取り出された価値ある一品はマスターの確かな鑑定眼に値札をつけられて商品棚に加わり、相応の現金は依頼料と報酬に変換された。

これだけの額があれば、６人で分けても、数ヶ月は仕事せずに暮らせる。痛んだ

装備をこの際に買い換えるのも建設的なプランだし、余裕を利用して専門的な鍛錬や勉学に励み、能力を一層に伸ばすのも良い。夢は膨らんできただろうか？

さぁ、選ぶが良い。能動的な決断行為は、運命によって選ばれるという逆説的な受動行為となって、次の物語を構築していくのだから――